2014 ふゆトピア・フェア in釧路

1月23日（木）～24日（金）の2日間、釧路市観光国際交流センター他で、ふゆトピア・フェアが開催されます。当イベントは、今回で10回目を数え、地域の除排雪体制の現状や課題、冬期の交通障害への対策など、地域のくらしに密着したさまざまな取り組みに対する意見交換を行い、寒冷地独特の自然を活かした冬期観光の活性化など、国内外への情報発信を通じて、寒冷地の魅力あふれる地域づくりに役立つことを目的に実施されます。詳細については、右記ホームページで随時情報をお知らせしていますので、ご覧ください。

◆**開催日時：**平成26年1月23日（木）～1月24日（金）

◆**会　　場：**

●シンポジウム・研究発表会・展示会
釧路市観光国際交流センター（釧路市幸町3-3）

●除雪機械展示・実演会
釧路市観光国際交流センター付近

http://www.hkd.mlit.go.jp/kanribu/chosei/fuyutopia/top.html

■主催：2014ふゆトピア・フェアin釧路実行委員会〈北海道開発局、北海道、釧路市、（一社）日本建設機械施工協会、（社）雪センター、（一社）北海道開発技術センター、（一財）北海道道路管理技術センター、東日本高速道路株式会社北海道支社、（一社）北海道建設業協会、釧路建設業協会〉

第13回「野生生物と交通」研究発表会のご案内

Symposium on Wildlife and Traffic 2014

「野生生物」と「交通」に関わる問題は、異分野間にまたがる学際的な研究テーマであるため、その情報交換の機会が極めて少ないのが現状です。この機会に、多くの方にご参加いただき、「野生生物」と「交通」に関する知識の情報交換の場として、ぜひご活用ください。現在、パネル展[1/24（金）締切]、聴講[2/12（水）締切]、懇親会[2/12（水）締切]の申し込み等を行っております。詳しくはホームページをご覧ください。

「野生生物と交通」ウェブサイト

http://www.wildlife-traffic.jp

開催概要

◆**開催日時：**2014年2月21日（金）10：00～
◆**会　　場：**札幌コンベンションセンター
（札幌市白石区東札幌6条1丁目1-1）
◆**主　　催：**（一社）北海道開発技術センター
◆**共　　催：**（一社）エゾシカ協会・（財）北海道環境財団
（一社）シーニックバイウェイ支援センター
◆**協　　力：**エコ・ネットワーク

参加費

◆**パネル展示：**無　料［2014年1月24日（金）締切］
◆**聴　　講：**無　料［2014年2月12日（水）締切］
◆**講演論文集：**予価2,500円（開催当日販売）
［2014年2月12日（水）締切］
◆**懇親会：**4,000円/人（予定）［2014年2月12日（水）締切］
美味しいエゾシカ料理が食べられます。この機会にぜひご賞味を！

※講演論文集は、研究発表会後もエコ・ネットワーク　にて購入できます。（送料無料）
※論文集購入に関するお問い合わせはエコ・ネットワークまで（TEL 011-737-7841）

お申し込み・お問い合わせ

（一社）北海道開発技術センター内「野生生物と交通」研究発表会係
●担当：向井・永井　●TEL:011-738-3363　●FAX:011-738-1889
●Email　wildlife@decnet.or.jp　●ウェブサイト　http://wildlife-traffic.jp

編集後記

明けましておめでとうございます。今年もdec monthlyにお付き合いのほど、どうぞよろしくお願いいたします。さて、1月11日（土）、チカホの北一条地下通路Cスペース（12番出口付近）にて、ウインターライフキャンペーンの第3弾となるイベントが開催されます。イベントでは、冬の体力アップや防滑グッズなど冬の暮らしに役立つ情報を紹介。お近くにお越しの際はぜひお立ち寄りください！（M.K）

dec monthly vol.340
2014年1月1日発行　発行人 本多 満　編集人
発行所 一般社団法人 北海道開発技術センター　〒001-0011 札幌市北区北11条西2丁目2番17号　TEL(011)738-3363　FAX(011)738-1889
URL http://www.decnet.or.jp/　E-mail dec_info01@decnet.or.jp

dec
dec monthly
ニューズレター デックマンスリー
一般社団法人北海道開発技術センター
www.decnet.or.jp
2014.1.1
vol.340

●今月の特集…
第29回 寒地技術シンポジウム2013 開催報告 前編
●お知らせ
2014ふゆトピア・フェア in釧路・「野生生物と交通」研究発表会開催のお知らせ

一般社団法人
北海道開発技術センター
佐藤　馨一

新年のご挨拶

明けましておめでとうございます。
平成26年が皆様にとって
ご多幸の年であることを心から祈願いたします。

SHOULDER TO SHOULDER TO OPEN A WAY

～人は皆兄弟、力を合わせてさあ、新しい道を拓こう～

平成25年10月からdecはセントラル札幌北ビル
（北区北11条西2丁目）に移転しました。
これまでのビルとは異なり3Fに全員が集合しており、
その眺めは圧巻で新しいdecが始まったことを実感させます。
昨年はJR北海道の事故やデータの改ざん問題で、
鉄道に対する道民の信頼が大きく損なわれました。
なかでも測量野帳を粗末に扱い、データを書き換えた行為は
技術者倫理に違反するものです。
下の写真は小樽交通記念館の前庭におかれたクロフォードの姿です。
彼は小樽－札幌－幌内間の鉄道を建設するために雇われた
アメリカの土木技術者です。トランシットを前にしたクロフォードは
正式な礼服、燕尾服を着ています。土木技術者が大地を測量する行為は
天皇陛下への謁見のように権威があり、大事であることを示しています。
私はクロフォードの次の言葉がすきです。
“SHOULDER TO SHOULDER TO OPEN A WAY”
decは寒地開発の理想を高く掲げ、
それを具体化する技術革新を進めることをお約束して、新年の挨拶といたします。

第29回 Cold Region Technology Conference 2013 寒地技術シンポジウム 前編

2013年11月20日から22日の3日間、札幌コンベンションセンターを会場に第29回寒地技術シンポジウムが開催されました。北国・雪国の生活文化の多様なテーマについて、多くの参加者が活発な情報交換を行いました。

■主催／一般社団法人　北海道開発技術センター

開会挨拶　dec理事長　本多　満

本シンポジウムは、1985年の第1回開催以降、寒冷地域の技術情報の交換を目的としてまいりました。対象分野を工学から自然科学、人文科学まで広く求め、積雪寒冷地帯の新たな共有指針を構築する上での、地道かつ具体的なアプローチの場となることを願うものです。

寒地技術表彰式

2013年度、寒地技術賞「学術」「産業」「地域振興」の3部門の発表と受賞理由の説明がdec本多理事長より行われました。

＜学術部門＞

定点カメラによる雪崩観測

◆栗原　靖氏
公益財団法人　鉄道総合技術研究所　ほか

算出が極めて困難な積雪底面における動摩擦係数を、定点カメラで実際の全層雪崩を発生時から観測することで、実データで積雪底面における動摩擦係数の算出を可能としました。今後、全層雪崩のメカニズムの解明に寄与すると評価されました。

＜地域振興部門＞

ハイパーLEDを活用した新たな視線誘導対策

◆井上　秀行氏
パシフィックコンサルタンツ株式会社　ほか

冬期の道路交通の安全を確保するため、吹雪時の視線誘導対策は極めて重要とされてきました。すでに設置している矢ばねに大光量LEDを取り付けることにより、LED本体の光だけでなく、LEDから下方に照射される柱状の光により視線誘導するシステムの実験報告。新たな製品開発につながり冬期の交通安全に寄与すると評価されました。

表彰の様子

＜産業部門＞

寒冷な地域特性を生かした産官学発展の取り組み

◆中村　一樹氏
北海道大学大学院地球環境科学研究院　ほか

占冠村、星野リゾートトマム、北海道大学の3者は産学官の連携を通して、占冠村を中心とする環境保全、観光振興、地域社会の発展を目的とした協定を締結。この地域が抱える環境問題について北海道大学が調査し、その結果を課題解決に活用し、さらに教育や環境に生かすなど、新たな地域の活性化や人材育成に寄与すると評価されました。

トークセッション　「なぜ、ゆきかきは楽しいか」

北海道の冬の雪かきは、辛いものとされていますが、世界の中には雪かきを楽しむようなところもあり、今回のトークセッションではちょっと視点を変えて、「なぜ、ゆきかきは楽しいか」というユニークなテーマで行いました。個性豊かなパネリストの、ゆきかきは「ゲーム！」、「出会い！」、「萌え!」、「アート！」などの、独自の世界観が披露されるなか、会場は笑顔と爆笑につつまれる不思議ワールドとなりました。雪国の課題を切実に語るだけではなく、さまざまなアプローチやオプションがあっていいのではないか。あえて、これまでのジャンルを超えた新しい切り口の模索へ…。パネリストの発言の要旨をまとめました。

■浜野　真愛氏
（札幌オオドオリ大学雪ドリ部副部長）

札幌オオドオリ大学とは、札幌市全体をキャンパスとして、すべての札幌市民が参加し学ぶことができる大学です。各団体がさまざまな活動をおこなうなかで、オオドオリ大学の雪ドリ部はゆきかきの手法を学び科学するといった、雪に特化した活動を行っています。岩見沢などの豪雪地帯での除雪ボランティアや、夏には札幌中心街に雪を持ってくるなどのイベントを開催しました。少し私の自己紹介をさせていただくと、出身が札幌で普段は会社員をしています。みなさんに驚かれますが私はゆきかきが大好きです。私なりに「ゆきかきの楽しさ」を分析すると、そのゲーム性やスポーツ性、近所や地域との交流性など様々ありますが、なによりゆきかきをすると感謝されることが大きな喜びです。ゆきかきは辛いと思っている方が大半だとは分かっていますが、どうせやるなら楽しくやりましょう。今後も私のような「ゆきかき好き!」が増えるよう、活動を続けていきたいと思っています。

■小西　信義氏
（北海道大学大学院文学研究科）

どうすれば「ゆきかき」が楽しくなるのでしょうか?自分の場合は、雪かきの道具も楽しさを感じるひとつです。木製のスコップの時代から現在のママさんダンプまでの歴史を調べてみると、進化の過程や現在の道具の奥深さに思わず「萌え」てしまいます。

現在は岩見沢の美流渡という豪雪地域をフィールドとして、地域の方と生活を共にしながら、人類の北方適応などの人類学的な研究を進めています。北国の人々にとっての「ゆきかき」は、地域における「共助」といった文化を築いたと思います。「ゆきかき人類学者」の卵として、どうすれば楽しくて、地域に役立つ「ゆきかき」ができるかを考えています。

■上島　信一氏
（北海道コカ・コーラボトリング株式会社）

会社の業績がなかなか伸びない時期があり、その時スタッフと「そもそも業績とは何だろう」という話になりました。それは「選ばれた証（あかし）」だろうということになり、では、選ばれるためにはどうすればいいのかと思ったわけです。今日、CSRとは企業の社会的責任と訳されますが、この思いをきっかけに私はCSRに関るようになりました。飲料などが選ばれる理由は「おいしい」とか「好き」とか、ほめられたり共感を得られることで、さらには「ありがとう」と感謝され誰かの役に立つことにつながってきます。そこで、私たちは北海道に役立つ存在であろうと、開発局や市町村などと協定を結びCSR活動に取り組み、自分たちの会社がある地域でもゆきかき活動に参加しました。さらには企業の枠を超えた連携、つまり、私が言うところの「よってたかって」の異分野交流型連携へと進化してきました。ゆきかきの楽しさは、新たな出会いがあることです。みんなが「よってたかって」ゆきかきを楽しめるような、ゆとりある社会にできたらいいですね。

■トムスマ・オルタナティブ氏

トムスマとはアイヌ語で「キラッと光る石」という意味です。宇宙の中でヒカリに照らされ輝く石＝地球というイメージから、地球を表現した“かぶり物”で各地をまわっています。まず、私が指摘したいのは、ゆきかきだけでなく今すべての事柄が、従来の考え方では解答を出せなくなってきているということです。ゆきかきを辛いと嘆くだけでなくポジティブに考え、さらに妄想のレベルまでその意識を高めることです。妄想より強いパワーはありませんから。そのパワーでゆきかきに対する既成概念を打破する。例えば、家の軒先を花で飾るように、冬には除雪をかね雪で軒先を飾るという新しい概念があってもいいと思います。庭の「石庭（せきてい）」をもじって、庭先の雪を「雪庭（せつてい）」ととらえるアートがあってもいい。雪が溶けてしまえば跡形も無く消えてしまう、まさに枯山水（かれさんすい）以上の「諸行無常」を表現できるわけです。また、冬のトライアスロンの競技として、マラソン、クロスカントリー、除雪とするなど…、妄想を掻き立てることでアイデアはいくらでも生まれてきます。

■原　文宏（dec地域政策研究所長）

今回のテーマ「なぜ、ゆきかきは楽しいか」には、北海道の冬に対する暗いイメージを払拭したいとの思いがありました。積雪寒冷地にとって雪のある暮らしこそが楽しく素晴らしいと、そんなプラス思考で社会を作っていく必要があると考えます。浜野さんは「ゆきかきはとにかく楽しい」と、また、上島さんからは「ゆきかきは辛いけれども、スポーツは辛くても楽しい」とお話があり、スポーツ感覚で雪かきが出来れば新たな展開があるのではないかと思います。また、小西さんからは「スポーツをする人は道具にこだわる人がいるので、例えばかっこいいスコップとかこだわりのあるスノーダンプがあっても良いのではないかと思う」などの意見が出て、ゆきかきを「競技化」して、スポーツにしてしまうという新たな発想が話し合われました。また、ガーデニングの延長上に「スノーガーデン」を考えてはどうかというトムスマさんのお話がありましたが、ゆきかきが辛いと思っている人からはなかなか出てこない発想で、冬の暮らしやゆきかきに新しい価値を見いだせるキーワードかもしれません。

トークセッションのまとめとして、多少無理があったかも知れませんが、若い世代がゆきかきに対して明るく前向きに捉えてくれていることに、少しの希望を見出せた思いです。

「寒地技術シンポジウム」という元々技術交流の場ですが、これまでとは違う分野の方に来ていただいてお話をしていただきました。チャレンジ的なテーマにもかかわらず積極的な意見が交わされ、今後の寒地技術シンポジウムの新たな出発点になればと思っています。